

「解放」か「敗北」か——
ドイツの「戦後50年」目の論争

三輪 晴 啓

Befreiung oder Niederlage?

—— Ein Streit in Deutschland über die
Bedeutung des “8. Mai” vor 50 Jahren

Haruhiro MIWA

“Der 8. Mai” in Deutschland entspricht “dem 15. August” in Japan: der Tag, an dem der Zweite Weltkrieg in Europa mit der bedingungslosen Kapitulation des Nazi-Deutschlands zum Ende ging.

In diesem Jahr 1995, 50 Jahre nach dem Ende des Krieges, entstand ein großer Streit in Medien und Politik in Deutschland über das Thema, was der 8. Mai vor einem halben Jahrhundert für Deutschland und die Deutschen bedeutete: Befreiung oder Niederlage?

Die einen vertreten die Meinung, der Tag befreite die Deutschen und alle Völker in Europa vom Terror der Nazis und vom Schrecken des Kriegs. Die anderen aber sehen in diesem Tag nichts anderes als die Niederlage Deutschlands u. a. im Hinblick auf die Vertreibung der Deutschen aus ihrer Heimat im Osten, das Leiden des Volkes und die Teilung des Landes.

Der Streit begann, abgesehen von der Vorgeschichte, mit einer Anzeige, die am 7. April 1995, gerade einen Monat vor dem 50. Jahrestag des Kriegsendes in einer einflußreichen deutschen Zeitung veröffentlicht wurde. Die Anzeige weckte sofort umfangreiche Reaktionen im Publikum. Zahlreiche Wissenschaftler, Politiker und Publizisten nahmen an der Diskussion teil.

In diesem Beitrag berichtet der Author über den Verlauf des Streits und kommentiert ihn so wie er ihn während seines Aufenthaltes in Deutschland im Mai 1995 beobachten konnte.

はじめに

ドイツの「5月8日」は、日本の「8月15日」にあたる。第2次世界大戦の欧州における戦争がナチス・ドイツの無条件降伏をもって終結した日（VEデー）である。

ことし1995年——50年後のこの日がめぐってきたなかで、半世紀前のこの日をどう見るかについて、ドイツで大論争が起きた。すなわち、この日はドイツとドイツ人にとって、「解放（Befreiung）」の日だったとみるべきか、「敗北（Niederlage）」の日とみるべきかをめぐって、激しい論争が繰り広げられたのである。

前者は、この日がドイツと世界をナチスの圧政と戦争の恐怖から解放した日だったとする考え方に立つものである。これに対して、後者は「東方領土」からのドイツ人の大量追放、国土の削減と分割などをもたらした屈辱的な敗北の日だったとする立場をとるものである。むろん、この両者の中間に無数の立場があり、そもそもこの日を「解放」か「敗北」かで色分けすること自体、無意味だという議論も出された。他方では、議論の中身より、「その主張が、どんなグループによってなされているか」が重要だという論法も数多く見ら

れた。いずれにせよ、この論争は統一ドイツとして初めて迎えたこの日の意義をあらためて問い直そうとしたもので、徹底好きのドイツ人らしい議論の応酬がつづいた。

論争は有力新聞紙上での「意見広告」の応酬としてつづけられただけでなく、多くのメディアを巻き込み、多数の政治家、学者、ジャーナリストらが、これに加わった。論点は多岐にわたり、議論は複雑に展開した。以下、筆者が1995年5月の訪独中に見聞したかぎりでの、この論争の経緯と主要な論点を紹介しつつ、若干の論評を加えたい。

論争のきっかけ——「敗北」派の攻勢

1995年、「戦後50年」の5月8日が迫るなかで、ドイツのメディアにはこれに関連する特集記事や特別番組があふれた。書店やキオスクには大戦回顧録や記録写真集などのたぐいの本が並んだ。ベルリンのような大都市だけでなく、小さな町や村でも、焼け跡などのパネル写真展や遺品・生活道具などの展示会、市民や学者によるシンポジウムやセミナーなどが開かれ、「当時」を想起し、将来を展望した。

こうしたなかで持ち上がったのが、半世紀前のこの日を「解放」の日とみるか「敗北」の日とみるをめぐり論争だった。論争は、いわば国論を二分するかたちで続けられた。

論争の直接のきっかけとなったのは、終戦記念日の1か月前の4月7日、ドイツの有力日刊紙『フランクフルター・アルゲマイネ』（保守系）に掲載された一つの意見広告だった。この意見広告は「5・8イニシアティブ」なるグループの「アピール」のかたちで発表されたもので、「1945年5月8日——忘却に抗して」と題されていた。300人近い同調者の名が、これに添えられていた。

「この1945年5月8日はわれわれにとって、最も悲劇的で最も懐疑的なパラドクスである。なぜなら、われわれは救済されると同時に、打ちのめされたからである」。

これは西ドイツの初代大統領テオドル・ホイスが戦後まもない1949年にのべた言葉である⁽¹⁾。

「アピール」は、ドイツでよく知られているこの言葉を引用して、この日のもつ意義が多岐的であることを強調したうえで、こうした考え方が今、背後に押しやられているとして、「解放」派に攻勢をかけた。

「5月8日は今日、メディアや政治家たちによって『解放』として性格づけられている。そのさい、この日がナチズムの恐慌支配の終わりを意味するだけでなく、同時に東方における追放テロと新たな抑圧の始まりであり、わが国の分割の始まりをも意味するものであることを忘れさせようとしている。こうした真実を黙視し、放擲し、あるいは相対化する歴史像は、自意識をもった国民の自己理解にとって基礎とはなりえない」。

周知のように、ドイツは敗戦の結果、当時の国土の4分の1にあたる「東方領土」を失い、その「故郷」を追われたドイツ系住民は1200万人にのぼった。うち200万人が西への逃避行の途上で餓えや襲撃などで命を落としたとされる。そして、縮小された国土は戦勝国による4分割を経て、東西ふたつのドイツの成立となり、それは1990年に統一されるまで40余年の長きにわたってつづくことになる。

敗戦がもたらしたこうした苦難と屈辱を看過することができないというのが、このグループの主張の骨子である。グループが「敗北派」と呼ばれるゆえんでもある。

「アピール」の主唱者は、民族主義のルネッサンスを標榜する「ニューライト」の新聞『ユング・フライハイト（若き自由）』（週刊）の発行人ライナー・ツィテルマンらとみられている⁽²⁾。そして、これへの署名者297人には、極右政党NPD（国家民主党）を含むドイツの与野党の政治家をはじめ、学者、ジャーナリスト、ビジネスマン、旧軍人らが顔を揃えている。主として保守派の論客として知られている人たちである。

署名者のなかには後日、署名を撤回した人たちもいる。ハンス・アベル元蔵相・国防相（SPD＝社会民主党）もその一人で、「こんなグループとは知らないままに署名したのは軽率だった」と、撤回の理由を語っている⁽³⁾。

署名者のうちの最も著名人は、与党CDU（キリスト教民主同盟）の長老議員アルフレート・ドレッガー

(現・同党連邦議会議員会名誉会長)である。元国防軍将校でもあり、退役軍人会長の要職にもある。それだけに「国防軍将兵は(ナチの『SS(親衛隊)』などと違い)プロイセン軍の伝統に従い、規律を守り、祖国のために勇敢に戦った」といった発言を繰り返してきている。しかしこれに対しては、国防軍も、たとえ祖国を守るためとはいえ、ヒトラーに同調して残虐行為に加担したことは、数多くの記録が証明するという反論も多い⁽⁴⁾。

ドレッガーは、署名撤回を求める同僚議員らの説得に応じるどころか、その後も保守系の全国紙『ディ・ヴェルト』とのインタビューなどで持論を繰り返している。「この日に解放されたのは、すべてのドイツ人ではなかった。解放されたのは西のドイツ人だけであり、中部・東部のドイツ人にはあてはまらない。捕虜として長年シベリアなどに抑留されたドイツ軍将兵にとっても、そうである。この日を『解放』呼ばわりすることは、これらの人たちにとっては侮辱であり、挑発的でさえある。この日の定義は、『解放』派によって独占されるべきものではない⁽⁵⁾」というのである。

主流「解放」派の主張

「5月8日はメディアや政治家たちによって『解放』として性格づけられている」という「敗北派」の主張は、現実を言い当てている。今ドイツでは、国民の圧倒的多数がこの日を「解放」の日とみているという。少なくとも世論調査にあらわれたかぎりでは、「解放」派が80%前後にのぼる。そのいくつかを示すと――

①報道週刊誌『デア・シュピーゲル』がエムニード世論調査所に委託して行なった調査では解放派が80%を占めている。年齢別では、若い18―34歳で87%、年長の50―64歳で74%と、かなりの開きがあるという⁽⁶⁾。

②マンハイムの研究グループ「ヴァーレン(選択)」がドイツ第2テレビ(ZDF)の委嘱で行なった調査でも80%が解放派で、敗北派は12%にすぎない(残り8%は「どちらとも言えない」との回答)という⁽⁷⁾。

③週刊紙『ディ・ヴォッヘ』が14―26歳の青少年を対象に行なった調査でも解放派79%、敗北派11%という結果が報告されている⁽⁸⁾。

「解放」派の筆頭に上げられるのは、リヒャルト・フォン・ワイツゼッカー前大統領である。国民の大多数が「解放」派という背後には、彼の強い影響力がある。

ワイツゼッカーは10年前の1985年5月8日、大戦終結40周年の連邦議会での記念演説で、このことを明言した。「歴史の真実を直視せよ」と訴えたこの演説は、その格調の高さ、真摯な姿勢で、ドイツ内外に感銘を与え、ひろく世界に紹介された。日本語訳も数種類出ている⁽⁹⁾。その一節、「過去に対して目を閉ざす者は結局現在に対しても盲目になるのです」は、とりわけ人口に膾炙している。

前大統領はいう。「たしかに1945年5月8日は解放の日には他なりません。この日は私たちすべての者を人間蔑視の体制である国家社会主義(ナチズム)という名の暴力支配から解放したのです」。

そして、つぎのようにつづける。「こうして解放されたからといって、どれだけ深刻な苦悩が多くの人びとにとって5月8日とともに始まったのか、そしてその後も引き続き生じたのか、忘れる者はひとりもいないでしょう……しかし、その原因を戦争の終結に求めることは許されません。それは戦争の勃発に、否、戦争をもたらした暴力支配の始まりにこそあるのです。1945年5月8日を1933年1月30日(ヒトラーの政権掌握の日――筆者注)と切り離してはなりません……」⁽¹⁰⁾。

ちなみに、ワイツゼッカーは95年夏、日本の新聞社などの招きで、大統領の職を辞して後初めて来日し、東京などで講演したほか、マスコミ各社のインタビューにも応じて、その言説は大きく報道された。氏は、それらの機会でも「過去を直視せよ」という自説を繰り返し、「日本も謝罪すべきは真摯に謝罪すべきだ」と強調した。

ところで、ドイツ国民は終戦直後から、この日を「解放」の日と考えてきたわけではない。ベルリンの新聞『デア・ターゲスシュピーゲル』は5月7日、「解放への長い道」と題した長文の解説記事を掲げて、この経緯を説明している⁽¹¹⁾。要約すれば――

ドイツ（西）では「5月8日」は長い間念頭になかった。早く忘れたい日だったのだ。ホロコーストなどのナチの残虐行為についても深く考えなかった。どん底の「ゼロアワー」から出発して、全力を上げて復興に取り組んでいた時期で、そんなことを考える余裕がなかったのだ。当時の首相アデナウアーの「現実政策」もこれに与した。こうして戦後の20年間は、「5月8日」は勝者たちの記念日にすぎなかった。

戦後20年の1965年、エアハルト首相が初めてこの日、ラジオとテレビで国民に向けて演説した。70年には、ハイネマン大統領、ブランド首相らが「大戦終結の日に寄せた声明」を発表し、戦争の犠牲者を悼んだ。戦後30年の75年にいたって、シェール大統領がその演説で、この日を初めて「解放の日」と呼んだ。すなわち「戦争、殺戮、奴隷、蛮行などの恐怖の軛（くびき）から解放された日」だと語ったのである。この文脈が85年のワイツゼッカー演説に受け継がれた——というのである。

大戦終結の日を「解放」の日とみる見方が大勢となるのは、ドイツでそれほど古いことではなく、戦後の歩みのなかで次第に醸成されていったことがわかる。

解放派・ユダヤ人側からの反論

4月7日の「敗北」派の「アピール」は大きな反響を呼び、ドイツの全メディアを巻き込んでいった。賛否さまざまな論議が沸いたなかで、これに真っ向から反論したのは進歩的な論調で知られる全国紙『ディ・ツァイト』（週刊）である。同紙は4月14日、一面のコラムで「追憶」と題して、つぎのように反撃した⁽¹²⁾。

「1945年5月8日が『解放』と性格づけられているのを、彼らは『一方的だ』という。この日は『追放テロと新しい抑圧の始まりでもあった』というのである。このことを忘れないのが『自意識ある国民の自己理解』だそうである。

この駄文に署名している多数の人のなかには、修正主義的歴史観の宣伝屋として知られている人物が何人かいる。だから、そのテキストでも「5月8日はドイツの苦難の始まり」ということになる。ナチスのテロ、権力掌握、人種的狂気、アウシュビッツ……これらは、戦後につづいたものとくらべて、何だったのか。彼らが奏でているのは、『罪は同等だ』と叫ぶエンドレスのメロディーにすぎない。——ドイツ語では、これを『嫌悪すべきもの』と呼ぶ（要旨）。

同趣旨の反論は「解放派」からいっせいに上げられたが、とりわけ手厳しかったのは、ユダヤ人の側からの反論だった。

在独ユダヤ人（現在約6万人とみられる）の有力指導者、ドイツ・ユダヤ人中央評議会議長イグナツ・ブーピスは、みずからが所属する政党FDP（自由民主党）の党员からも「アピール」の署名者が出ていることに遺憾の意を表わしたうえで、彼らを「Ewiggestrige」、直訳すれば「永遠の昨日人」と呼んで非難した。つまり「古い考えから永遠に抜け出せない者たち」というのである。「彼らは1933～1945年のすべてを継続したがっているのだ。ただし、民族殺害などはやらない、もう少し穏やかなやり方で——」⁽¹³⁾。

しかし、このブーピスの主張に対しては、当の『フランクフルター・アルゲマイネ』紙が翌日の社説で反論した⁽¹⁴⁾。「この論では、保守派とは『ナチスから民族殺害をマイナスした者』ということになる。これでは、この立場に身を置く者は政治的にも道義的にも『オーバーキル』にさらされることになる。ナチには社会政策や家族政策にたずさわった者も、経済興隆策を推進した者もいた。彼らは左でもあったし、右でもあった。彼らはいわば極端主義に走った中道主義者でもあったのではないか？ 社会政策家や家族政策家、その他は、今日でもいる。その全員が『マイナス民族殺害』なのか。ブーピスの言ったことは、最も好意的にみても思慮不足である。すみやかに忘れるのがよい」。

まわりくどい表現だが、要するに、ブーピスの論は「現在の保守派の政治家たちもユダヤ人の虐殺をやらなただけのナチだというにひとしい」という反論である。保守派の新聞に特有の論法の一つである。

だが、ユダヤ人の側からの反論はつづく。

「5. 8イニシアティブ」の意見広告が出されてから10日後の4月17日、やはり『フランクフルター・ア

ルゲマイネ』紙に、ほぼ同じスペース（紙面の下段約4分の1）を使って、新しい意見広告が掲載された。この広告は、ナチスに肉親を殺されたり迫害されたユダヤ人一家の4人の名で出され、ほかの同調者の署名などはない。タイトルは、やはり「忘却に抗して」とある。ただし、「抗して」のドイツ語は、前の広告の「gegen」に対して、ここでは「wider」が使われている。ほとんど同義語で、日本語への訳し分けは困難である。双方とも「忘れるな——」といおうとしているのだが、その立場はまったく逆である。

新広告は、「ニューライトたちの広告が、ユダヤ民族の半分を根こそぎにしたことに一言の遺憾の意も表わしていないことから、罪なき犠牲者に捧げるわれわれのアピールを、この場で公けにする」と前置きしたあと、「いかにして忘れることができようか」と題して、ナチスの「罪状」を具体的な事実や数字をあげて列挙する。その最初の数項目を紹介すれば——

- 500万の子供たちがナチの処刑人たちによって死なねばならなかったことを、
- 150万のユダヤ人の子供たちが組織的に殺されたことを、
- 5500万の人間の生命が、1933～1945年の間に抹消されたことを、

以下、さまざまな「罪状」が並べられたあと、「永遠の悲しみのうちに忘却に抗する」として、つぎのような言葉がつづく（要旨）。

「何百万のドイツ人の避難と追放も、ドステンその他の都市への爆撃も、ヒトラーとその手先たちによって始められた戦争の結果にほかならない。攻撃戦争とヨーロッパの半分の破壊なくしては、避難も追放も報復もなかった。因果応報の結末であり、ドイツ人の圧倒的多数がヒトラーに歓呼の声を上げただけに、なおさらそうである。

だが、このように考えることは、古い根っからのファナティックなナチたちには期待できない。ノルテ⁽¹⁵⁾、ツイテルマン、ドレグラー、その他の連中、すなわち、一民族全体のジェノサイドを、比較しうる犯罪行為の一つと考えているらしい、あのグループにしても、同様である。けっして忘れられない犠牲者たちが、彼らの足で踏みにじられているのだ。……同情されるべきは殺人の犠牲者であって、その実行者ではない。人間の尊厳は不可侵であり、虐殺された何百万のユダヤ人の尊厳も然りである。

人間の歴史に類例なく存在した暴政は、1945年5月8日に終わった。比較のない日付である。相殺を許さない日付、オルタナティブのない日付である」

広告はこのようにのべて、ナチスのユダヤ人虐殺をあくまでも絶対悪として糾弾している。これが重要なポイントであることは疑いを得ない。だが、議論としては「敗北」派の論旨と噛み合っていない。

「敗北」派の再反論

「敗北」派は4月28日、再び『フランクフルター・アルゲマイネ』紙に意見広告を載せ、「解放」派に再反論した。この再反論は、ナチスのユダヤ人大量殺害を弁護する気はないとしながらも、一方的な意見を押しつける「意見テロ」に抵抗し「精神の自由を守る」と、一段とトーンを高めて、つぎのようにいう。

「われわれが4月7日に発表した『アピール』に無数の人びとから即時の同意を得られたことは、一部メディアが『5・8イニシティブ』について伝えた論調とは対称的なものである。たとえば、『ディ・ツァイト』はわれわれのテキストを『嫌悪すべきもの(widerlich)』と呼んだし、いつもはドイツ人追放の不法、SED（旧東独の支配政党＝事実上の共産党）の不正を論じているラルフ・ジョルダーノ⁽¹⁶⁾は、遺憾ながら『5・8イニシティブ』は『癌腫瘍(Krebsgeschwür)』の存在証明だとの評価を下し、署名者のリストは後年世代のなかの『悪性腫瘍(Metastasen)』を示唆しているという。

考えを異にする者を『癌腫瘍』だの『悪性腫瘍』だのと呼ぶ生物学的な言い方はナチ支配が終わって50年のドイツでは、もはや不可能なはずであった。だが、保守派や批判的リベラルとの論争では、ドイツではすべてが許されるようである。

1945年以降の追放テロや共産主義の独裁を語る者は、そうすることによって1933年に開始されたドイツか

らのユダヤ人の追放、およびその後のヨーロッパのユダヤ人その他の少数民族の大量殺害を相対化ないし無害化しようとしているのだとする、いわれなき推論は堪え難い。今世紀において全体主義システムの名において人間に加えられた苦痛は相殺することを許されない。

むろん、『5月8日』はさまざまな歴史的視角から見られうる。だが、かくも二律背反的な歴史的な日についての見方が、たった一つしか可能でないという社会は全体主義的であろう。DDR(旧東独)では、『5月8日』については政府が公式に指示した見方があり、それによれば、この日は『解放の日』として祝われていた。だが、複数制民主主義は、すべての市民が同調しなければならないという全面拘束的な歴史像なるものを知らない。政治的正しさ(political correctness)という意見テロに対抗し、精神の自由を守るよう、われわれはすべての——左から右までの——民主主義者に呼びかける。

ここでは「敗北派」グループは、「意見の多様性を認めよ」という主張を前面に打ち出し、彼らの主張を認めない「解放」派を「全体主義者」呼ばわりしている。立場が逆転したかのようである。論理的には、この主張にもじゅうぶんな根拠がある。だが、問題はどんな人たちがそれを主張しているかであり、主張の力点をどこに置いているか、だとする批判からは、いぜん免れていない。

ちなみに、ここにいう「旧東独では、この日が『解放の日』として祝われていた」とは、正確に言えば「ソ連の手によって、ドイツがヒトラー・ファシズムから解放された日」として、国の祝日とされていたことを指す(東独建国後20年間ほどのことだが)。この日は休日とされ、ベルリン(東)での戦勝記念パレード(むろんソ連軍中心の)などのほか、各地でパレードや式典などが催されていた。こうしたなかで、「第2次大戦では、東のドイツ国民はソ連とともに西の帝国主義ドイツに勝利したのだ」という倒錯的な教育・宣伝なども行われていた。「敗北」派は、東でのこうした経緯に対する不快、嫌悪の念を隠さない。

「解放」派・「敗北」派双方の主張は、ここでも噛み合っていないが、これについて、『ディ・ツァイト』紙は4月21日、同紙の共同発行人のひとり、マリオン・デンホーフ夫人の論文をフロントページに掲げて、「両者は対立ばかりしないで『和解』してはどうか」と呼びかけた。この論文は「われわれは勝ったほうがよかったのか? 5月8日をめぐる論争: 解放——イエス・アンド・ノー」というタイトルのもとに、つぎのように主張している(要旨)。

「どうして、ドイツではいつも決闘になってしまうのだろうか。一方はこの日を解放の日と呼び、反論を許さない。他方——数にして300人ほどだが——は怒りの叫びを上げ、解放者の『追放テロ』を弾劾している。『解放』と考える側の代表は、これに反論している。すなわち、本当のテロを開始し、絶滅戦争とアウシュビッツを実行したのは、ドイツ人だった。そのうえ、解放に代わるものはヒトラーの勝利しかならう。これが意味しそうなことを推測するには、1933年を振り返ってみるだけでじゅうぶんだ、と。

だが、解放がすべてではなかった。悲劇と新たな困窮も現実だった。連合国の指令にも彼ら自身の言葉で、こうある——『ドイツは解放を目的としてではなく、敗れた敵国として占領される』。勝者が国の主権者であったし、国には政府もなければ立法府もなかった。何千ものドイツ将兵が、なお10年間もソ連の捕虜として抑留されねばならなかった。1200万人の難民と被追放者が、いっさの家財だけでなく故郷をも失った。そして、東ドイツ人は一つの独裁から解放されるやいなや直ちにつぎの独裁の手に陥ちた。

当時、あの1945年5月8日には、人びとは複雑に入り交じった感情にとらわれていた。希望、安堵、心配、不安、絶望が密接にからみあっていた。今日世界では、『和解』が多くの人によって口にされている。ならば、なぜわれわれが、まず自分たちのところで、それを始めないのか」

自説である「解放」派に与しながらも、「敗北」派の主張にも目くばりし、双方が歩み寄ることを求めたものである。一方的な主張の応酬が繰り返されたなかで、数少ない「建設的」な提言である。だが、「本質」論に固執する論者たちにとって、こうした「足して2で割る」式の提言があまり説得力をもたなかったことも、論争の経緯が示している。

解けないパラドクス

これまで見てきたように、「解放」か「敗北」かの論争は、この日についての解釈の多様性を認めるかどうかの争いでもある。しかし、少なくとも「アウシュビッツ」については、その解釈は一義的でなければならず、ユダヤ人虐殺に反省も謝罪もせず、ドイツ人の苦難だけをあげつらう「リビジョニスト（修正主義的歴史観の持ち主）」は「戦争がドイツ人自身によって始められたことを忘れたもの」という批判のもつ意味は重い。他方で、解釈の多様性を主張する側の人たちの背後に狭量な「ナショナリズム」が見え隠れするのも事実である。そして、「ナショナリズム」は民族ないし国民に根ざす本質的なものでもある。

「1945年5月8日ほど、ドイツ現代史においてドイツの社会とドイツ人の意識を深く切り裂いた日はない」と、ライン地方の新聞『ライニッシャー・メルクール』は解説している⁽¹⁷⁾。そして、この日にふさわしい呼び方は「引き裂き (Zerrissenheit)」だろうという。「ドイツが引き裂かれ、ヨーロッパが引き裂かれた。国土だけでなく、社会そのものが引き裂かれ、ドイツ人のナショナルな自己理解が引き裂かれた——」

こうした「引き裂かれたもの」の修復が容易でないことはいまでもない。『ディ・ツァイト』のデンホーフ夫人が提言するような『和解』が実現する気配もない。まさしく、ドイツにとって「1945年5月8日は最も悲劇的で最も懐疑的なパラドクス」というホイスの言葉どおりであり、このテーマは、いくら論争を重ねても解けない矛盾をはらんでいる。

じつは、この論争には前史がある。先に触れた1985年のワツゼッカー演説も一つのきっかけとなって、翌86年、有名な「歴史家論争」(Historikerstreit) が起こり、ドイツの知識層を論争の渦に巻き込んだ。論争は、やはり『フランクフルター・アルゲマイネ』と『ディ・ツァイト』の両紙に、それぞれ掲載された保守派、進歩派の学者の論文がきっかけとなって引き起こされた⁽¹⁸⁾。

そこでは、それまでの「タブー」をやぶるように、「アウシュビッツ」は絶対悪ではなく、スターリンの「収容所列島」などと比較しうる相対的な罪悪だったという論法が、保守派の学者、ジャーナリストらから持ち出されて、大きな反響を呼んだ。これに加えて、「ナチスは共産主義の拡大を防ぐ役割りを果たした」「国防軍将兵は祖国のために勇敢に戦った」などの主張も行なわれた。いわゆる「リビジョナリスト」たちの登場であり、これに反論する進歩派の学者、知識人らとの間で激しい論争となった。

この「歴史家論争」は決着がつかないまま、ほぼ1年後には下火となった。今回の論争は「50年」をきっかけに、それが再燃したかたちでもある。当時の論客たちの何人かが再び加わって、同じ論旨を蒸し返している。「解放」派が多数派として定着する一方で、「リビジョナリスト」たちの主張も、国民のあいだで根強い支持を得ていることが、今回の論争でもあらためて浮き彫りにされた。

ドイツは1989年11月の「ベルリンの壁」崩壊を経て、翌90年10月3日、念願の統一を達成した。旧東独駐留のロシア(ソ連)軍40万を含む戦勝4大国の占領軍も、約束どおり94年夏までに撤退を完了し、ドイツは完全な主権を回復した。そして95年、統一ドイツは50年目の「5月8日」を、戦勝国といっしょに祝うまでになった。

5月8日のベルリンでの「大戦終結」記念式典に、米英仏ソの4大国首脳が招かれただけではない。これと前後して旧連合国の首都パリ、ロンドン、モスクワで行なわれた式典やパレードにも、ドイツのヘルツォーク大統領やコール首相らが招かれて出席している。その模様はテレビの衛星中継などをつうじて世界に伝えられ、もはや「敵も味方もなく」「勝者も敗者もない」姿が諸国民に印象づけられた。

筆者は、このうちベルリンでの式典を会場取材する機会を得たが、今回の論争との関連では、現大統領ヘルツォークがそのスピーチで、50年前のこの日を「未来に向けてのドアが開けられた日と理解している」と語ったことが印象に残っている。

61歳の「若い」大統領は「解放か敗北かの論争はあまり実りのあるものではない。さまざまな人のさまざまな経験をじゅうぶんに受け入れる余地がないからであり、わたしの前任者ホイスやワツゼッカーがすでに基本的な方向づけをしているからである」とのべて、議論に深入りすることを避けたいと、こうつづけ

た。

「しかし、1945年5月8日をまったく知らないか、私のようにほんの子供として経験したにすぎない、より若い世代に属する者として、私はこの日を——たとえ後知恵だったにせよ——何よりもドアが未来に向けて押し開かれた日として理解したい。おびただしい犠牲者の後に、そしておびただしい犠牲者のもとにおいて、ではあったが、それでも未来へのドアが……」

各国首脳をはじめ1300人のゲストで埋まった会場いっばいに、ここで大きな拍手が起こったことを、筆者のメモは記録している。

かつて30年前の1965年のこの日、モスクワに駐在していた西独大使ハンス・クロルは「自分たち自身の敗戦のために乾杯するわけにいかない」と、ソ連の戦勝記念パーティーへの招待に応じなかったことを日記に記している⁽¹⁹⁾。10年前のワイツゼッカー大統領（当時）も、先に引用した演説で「5月8日はドイツ人にとって祝典などを催す日ではない……われわれが戦勝祝賀会に参加する謂われもない」と語っている⁽²⁰⁾。

しかし、「解放」であれ「敗北」であれ、この日を「戦勝国とともに祝う時代」が（少なくともドイツには）来たのである。ワイツゼッカー氏自身も式典会場の貴賓席に、その端正な姿をみせていた。あれから10年を経て「時代は変わったと」の認識が、その胸中にあったことだろう。

こうした事実は、かつて東独国民が、この日を「解放」の日としてソ連とともに祝った（あるいは祝わされた）のとは、まったく違う意味をもつはずである。だが、「ドイツ人は『5月8日』を、まるでフランス人が『7月14日』を祝うように祝っている」と、その「はしゃぎ過ぎ」を戒める論調がドイツの新聞にも見られた⁽²¹⁾。ドイツ人の「はしゃぎ過ぎ」には、ドイツ内外の目が厳しい。

「敗北」派が、記念日前日の5月7日にミュンヘンに呼びかけた決起集会は、資金不足もあって結局中止された。この論争の結末を示唆しているように思われる。

<注>

- (1) 1949年の5月8日、ホイスが議会評議会（制憲議会にあたる）でのべた言葉とされる。『DER TAGES-SPIEGEL』「Weltspiegel : Der lange Weg zum Tag der Befreiung」95年5月7日
- (2) 『DER SPIEGEL』95年4月17日号
- (3) 『DER SPIEGEL』同上記事
- (4) 『DER SPIEGEL』同上記事
- (5) 『DIE WELT』95年5月6日
- (6) 『DER SPIEGEL』95年5月8日号
- (7) 『SÜDDEUTSCHE ZEITUNG』59年4月29日
- (8) 『DIE WOCHE』95年5月8日
- (9) 永井清彦訳『荒れ野の40年』（岩波ブックレット、1986年）ほか
- (10) R. V. ウァイツゼッカー著・山本務訳著『過去の克服・二つの戦後』（NHKブックス 1994年）P22
- (11) 前掲『DER TAGESSPIEGEL』の解説記事
- (12) 『DIE ZEIT』「Gedenken」95年4月14日
- (13) 『FRANKFURTER ALLGEMEINE ZEITUNG』95年4月10日
- (14) 『FRANKFURTER ALLGEMEINE ZEITUNG』95年4月11日
- (15) Ernst Nolte。歴史学者、ベルリン自由大学教授。「歴史家論争」で「リビジョナリスト」の立場を代表する論陣を張った。
- (16) Ralph Giordano。ハンブルク在住のジャーナリスト。著書『Die zweite Schuld oder Von der Last Deutscher zu sein』Rasch und Röhring 1987（邦訳「第2の罪 ドイツ人であることの重荷」白水社 1990）

- (17) 『RHEINISCHER MERKUR』 95年 5月 5日
- (18) 『FRANKFURTER ALLGEMEINE ZEITUNG』 86年 6月 6日のErnst Nolte (注15参照) の論文、
『DIE ZEIT』 86年 7月11日のJurgen Havermasの論文など。なお「歴史家論争」の経緯などについては、佐藤健生『西ドイツの歴史家論争』(『思想』87年 8月号) ほか文献多数あり。
- (19) 『SÜDDEUTSCHE ZEITUNG』 95年 4月15日
- (20) 前掲『過去の克服・二つの戦後』 P23
- (21) 『SÜDDEUTSCHE ZEITUNG』 59年 4月15日